

第15回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展  
「日本館コミッショナー」指名コンペティション 応募案

西野達プロジェクト  
HOTEL GIAPPONE



2015年7月

提案者 : 大西 若人 (ジャーナリスト、朝日新聞編集委員)

出品作家 : 西野 達 (美術家)

■■■ 企画趣旨および作家選定理由 ■■■

ヴェネツィア・ビエンナーレ会場のジャルディーニ地区に立つ日本館は、2016年に建設からちょうど60年を迎える。漢字文化圏における還暦にあたり、その来し方をもう一度振り返る機会ともいえる。そこで今回、日本館の建築自体をテーマに据え、その存在を検証する展示を目指すことにした。

ビエンナーレ会場のパビリオン群には、伝統的、民族的な意匠をまとった建築が少なくない。そのなかにあって日本館は、数少ないモダニズム建築となっている。これは、日本館が建った時期と関連しているといえる。第2次世界大戦による敗戦後、1952年のサンフランシスコ講和条約を経て国際社会に復帰した日本が、その4年後に国際文化交流の表舞台であるビエンナーレ会場に送り込んだ形だ。

50年代は、日本国内でも、モダニズム建築の巨人ル・コルビュジエに学んだ、前川國男、坂倉準三、吉阪隆正、さらには丹下健三らによって、モダニズム建築の名作が生み出された時代だ。国際社会に開かれた文化のありようを示すためにも、当時の日本の建築界の力量を示すためにも、日本館にモダニズム建築が選ばれたのは、当然といえた。列強をはじめとする各国が国威高揚を目指して大戦前に建てた多くの各国パビリオンとは、この点で、大きく異なっている。

設計者に選ばれた吉阪も、ピロティを備えた無装飾な白い箱形建築を提案している。モダニズム建築は、ときにインターナショナルスタイルやユニバーサルスペースと呼ばれるように、地域性や用途を超えた普遍性を備えていることが一つの特徴といえる。

日本館についていえば、床の仕上げや張り出した壁、床に開いた穴など、かなりの個性を備えているが、一方で60年間、多種多様な美術展や建築展の会場として機能してきた。

では、その日本館の建築をどのように検証するのか。建築史的に、あるいは建築美学的に分析していく方法もありえるだろう。しかし、そうした分析は、多くは資料や書籍の形でもなしうるものだ。展覧会として求められている展示という形式によって、より効果的に、直観的に、空間的に、さらには身体的に検証するには、美術家の力を借りる選択肢もありうるはずだ。

2014年のヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展では、全体テーマにおいても、日本館の展示においても、モダニズム建築の詳細なリサーチが求められていたが、それを引き継ぎつつ、アートの力による別の道がありうることを示す、という意味合いもある。

そこで、美術家の西野達に、その検証と解釈を託すこととした。西野は、世界各地の記念碑や公衆トイレなどに、さらに構造物を付加することで、意味や様相を一変させ、評価を受けてきた。空間を考える空間、建築を考える建築という意味では、メタ空間、メタ建築とも呼びうる手法で、かつそこに、アート作品ならではの、率直な驚き、視覚の快樂、身体の実感が伴っていた。

今回、西野が生み出したプランは、日本館をホテルに変える、というものだ。日本館は毎年数カ月間、美術作品や建築資料、模型などの仮住まいとなるが、それを人間の仮住まいにしようというわけだ。そしてモダニズム建築である日本館には、それだけの許容力があることを示すことにもなりうる。同時に、慢性的にホテルが足らず、宿泊費が高騰し続けている国際観光都市ヴェネツィアへの言及ともなるし、設置されるトイレについては、トイレ不足のジャルディーニ地区に貢献することになる。

西野は、実際に人が宿泊する展示を目指している。一方でそれには、管理運営上の困難も予想される。だが仮に宿泊が実現しなくとも、ホテルと化した日本館を目の当たりにし、足を踏み入れた来場者は、改めて、50年代のモダニズム建築であり、かつ吉阪による創意にあふれた日本館の建築、空間の特質を読み取り、気づき、相対化するはずだ。率直な見る喜びや体感する楽しみとともに。

ここに、日本館の建築に対する、効果的で本質的な再解釈、検証が成立すると考えている。

2016年9月、私たちはこれまで見たこともない日本館と出会うことになる。

提案者： 大西 若人

おおにし・わかと

1962年、京都市生まれ。

1986年、東京大学工学部都市工学科卒。

1987年、同大学院修士課程を中退し、朝日新聞社に入社。

1991年以降、東京本社、大阪本社の文化部等で、建築や美術に関し、取材、執筆。

2010年から、編集委員。



■■■■ 作家による解説 ■■■■

HOTEL GIAPPONE

来年 2016 年は、吉阪隆正による日本館が竣工して、ちょうど 60 年、還暦にあたります。私はその事を考慮し、日本館の建物そのものを生かしたアイデアを提案します。この建造物の大きな特徴は、展示室に立つ4本の柱状の壁、床の規則正しい文様、地下と展示室を繋げる床の真ん中にあいた穴、展示室と屋根を繋げる天窓、普段はあまり人の視界に入らない天井の梁状のデザインとその間の無数の丸い明かり取り、があげられます。



それらの特徴を際立たせるように、室内空間にホテルを建設します。

展示室の床の真ん中に開いた穴の視覚的なインパクトを生かしながら、それを中心として周りにホテルレセプション、レセプショントイレ、2つのホテルルームを建設します。これらの建物の位置は規則的な床の文様にそって建てられ、日本館の構造を明確にします。

独特な存在感を持つ展示室の4つの柱は、ホテルレセプション、ホテルルーム、男子トイレに取り込まれ、それぞれのスペースで重要な役目を担います。

ホテルのバスルームとレセプショントイレの上下水道は、展示室の床の穴を通して地階の日本館のトイレの上下水道と繋げられ、実際に使用出来るようになります。展示室の床の穴は、このようにして、位置的にも構造的にもこのプロジェクトの要となります。

下水道に使われる塩ビパイプの設置には傾斜が必要である為、展示室内の建物は展示室の床から約 150 センチの高さの足場の上に建設されます（レセプション男子トイレは除く）。床がかさ上げされたことにより日本館の一つの大きな特徴である天井と観客の距離が近くなり、人々はその美しさを認識しやすくなります。

天窓は、ホテルルームのエアコンディショナーのアルミダクトと、バスルーム/トイレの換気アルミダクトを外へ出す通り道の役目を負います。

レセプションの男子トイレだけは、展示室の床に直接作られます。（大便器は男子トイレ内でかさ上げされます）。

ホテルルームに置かれているテレビの為に、いくつかのテレビ番組（もどき）を制作し、それを開催中に流します。

例として、

- 吉阪隆正と日本館に関する番組、
  - 日本の旅館/ラブホテル/カプセルホテルに関する番組、
  - 日本の現代建築に関する番組、
  - 1964年と2020年の東京オリンピックの為に都市計画に関する番組
- など。

この作品に使われる便器はすべて温水洗浄便座（ウォシュレットなど）を使用し、世界的に有名な日本の便器を見せる場にします。

ホテルルームに非常口が必要な場合は設置します。ホテルルームに火災探知機、警報機が取り付けられます。

このアイデアのきっかけになった一つとして、常に混んでいるヴェネツィアのホテル事情と

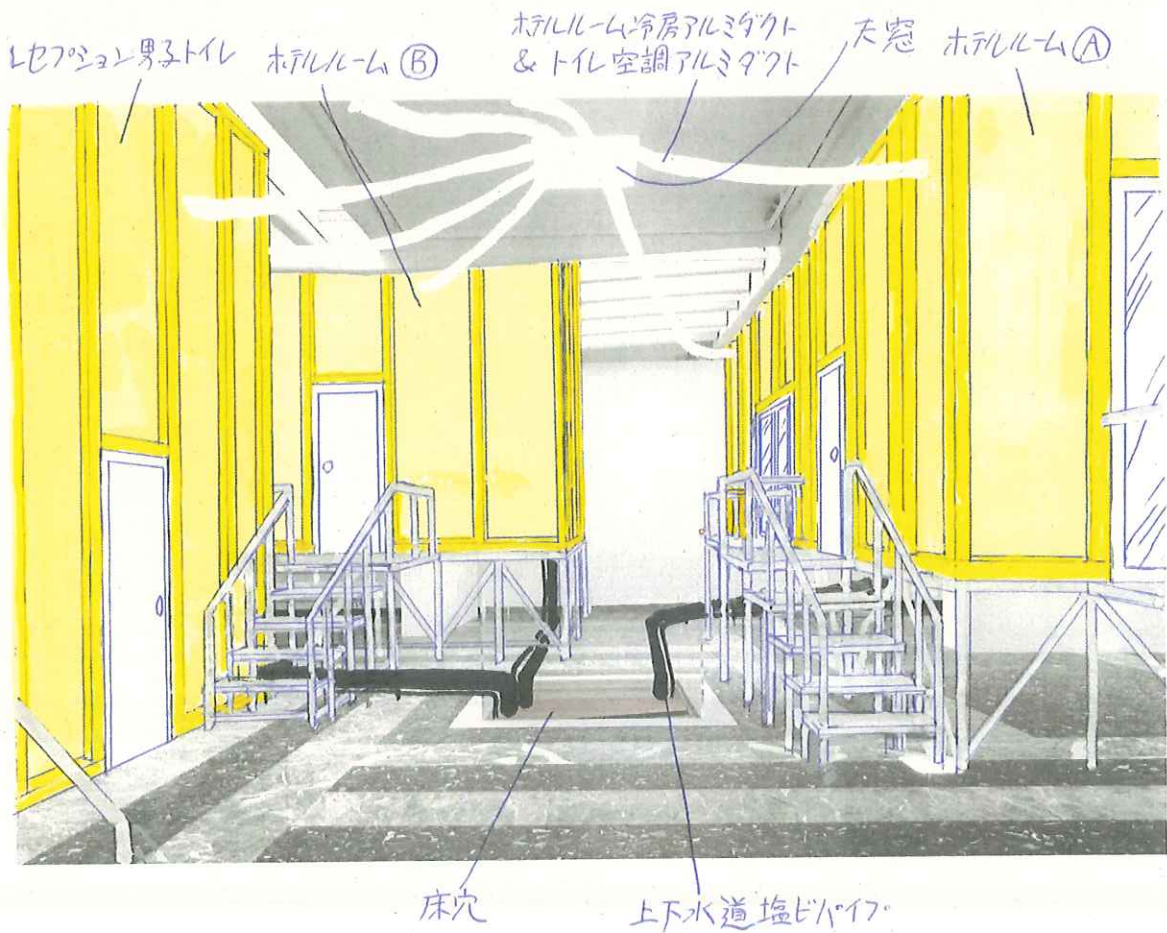
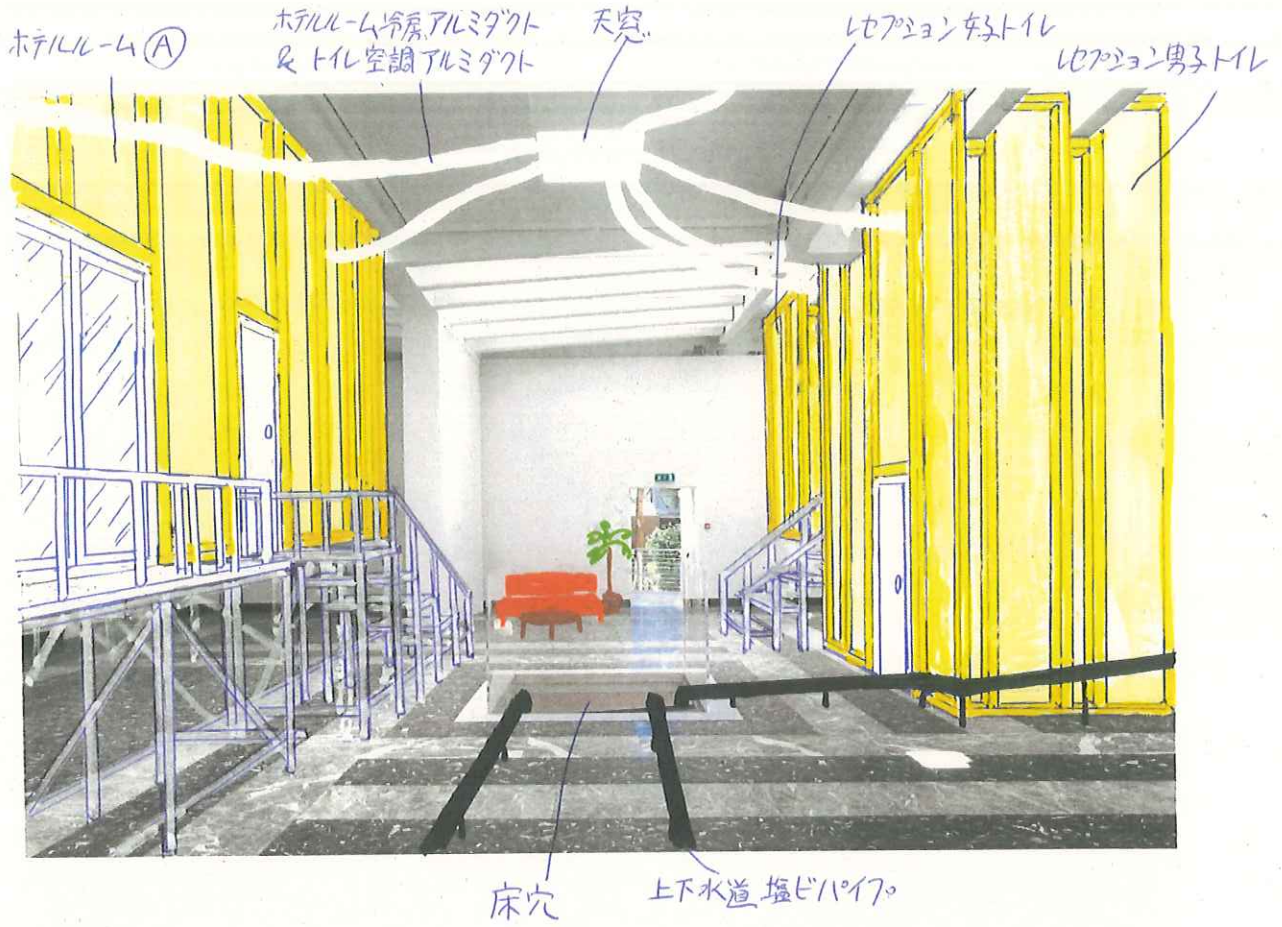
も関係しています。この作品は、今までの私のホテル作品のように、会期中に実際に観客が宿泊出来るホテルとして機能しますが、ヴェネツィアのその問題点をも含んだ作品ともなります。

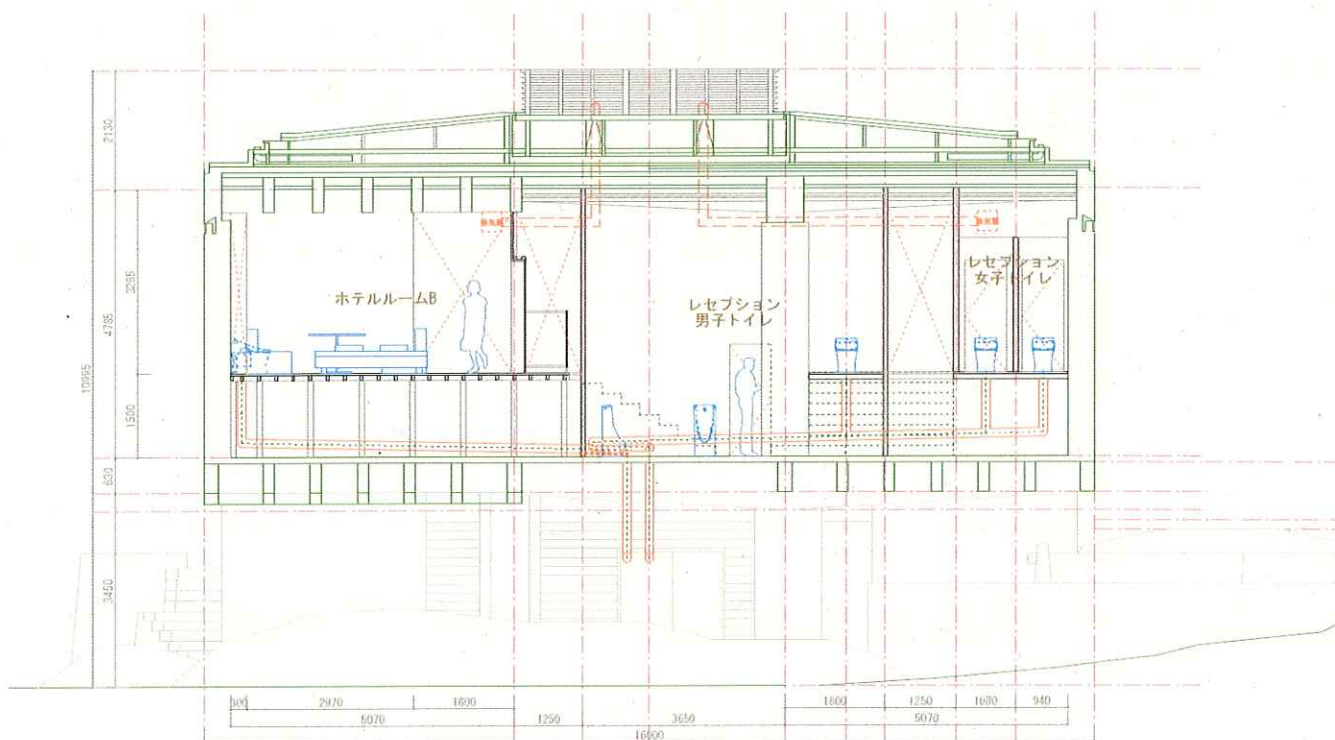
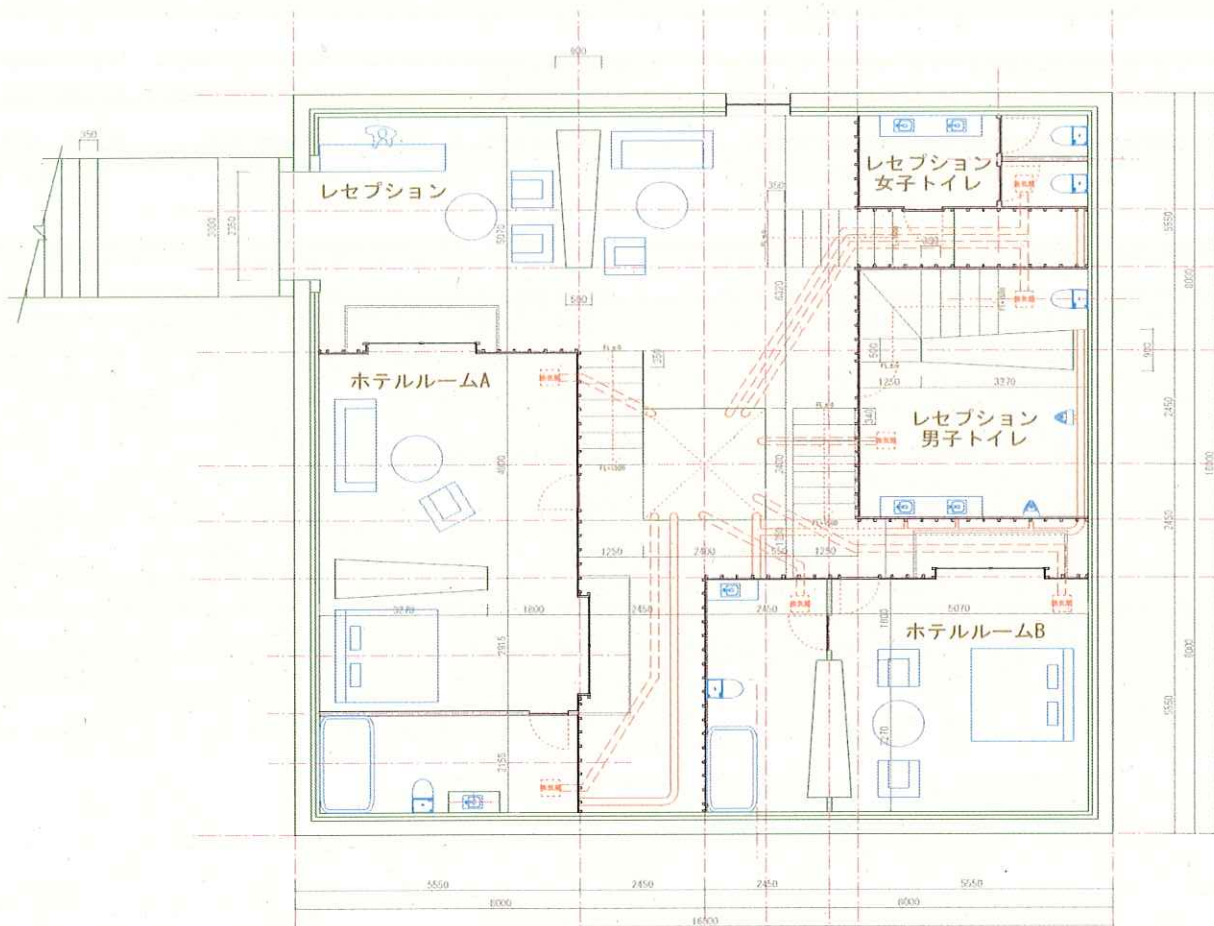
しかし、許可などの問題でもし宿泊することがクリアされなかった場合でも、展示室内のレセプショントイレは使用可能であり、公衆トイレが少ないジャルディーニ（カステッロ公園）の問題点を緩和することが考えられています。そして、宿泊が許可されなかった場合のホテルルームは、上記されているように日本のテレビ番組（もどき）を視聴するスペースとしての役目に変化します。

宿泊が無理な場合でも、昼間に滞在するデイユースも考えられます。高級ホテルがデイユースをしているのも日本独自のようなので、そこから日本を考察することも出来るに違いありません。もしデイユースが可能な場合、ホテルルームの1室はデイユースとして使用され、もう1室は他の観客の為に開放されます。

出品作家： 西野 達

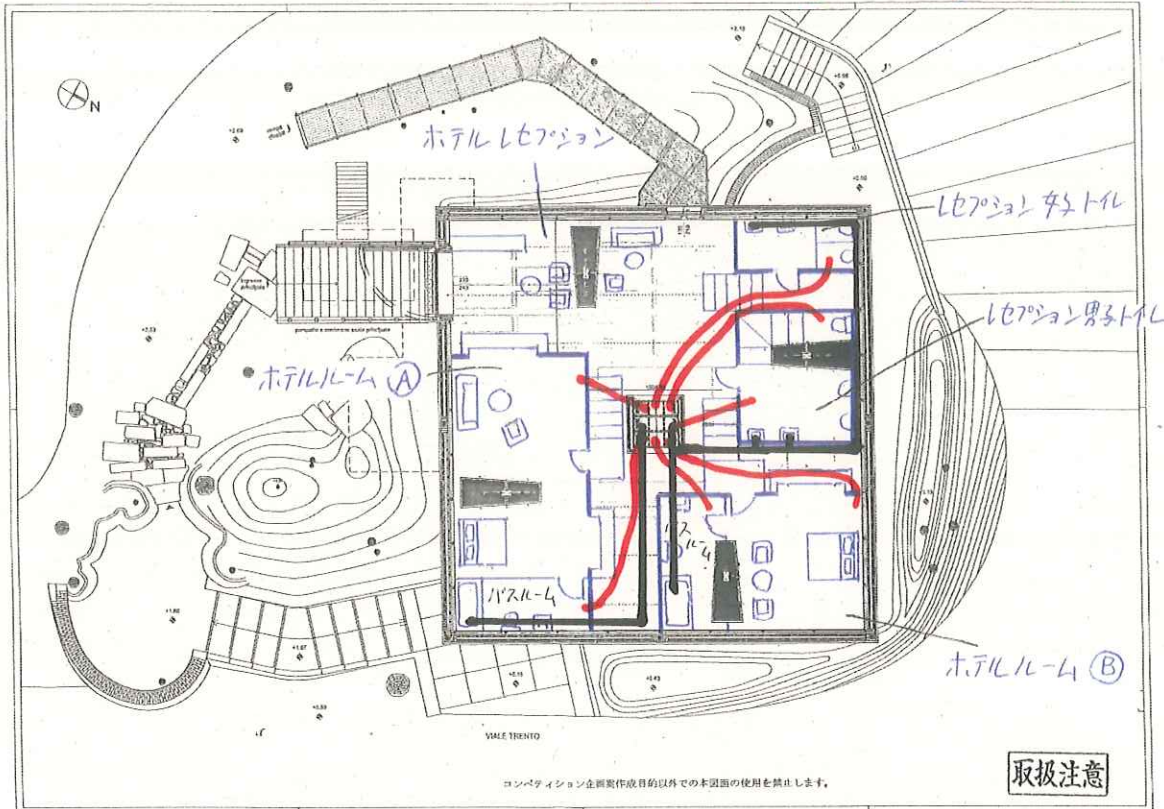








HOTEL GIAPPONE 上下水道塩ビパイプ ホテル-4床屋アヒダグサ & トイレ空調アヒダグサ



■■■■ 予算案 ■■■■

本体制作費	1500万円	
		仮設工事（単管） 160万円
		建築工事（壁床） 475万円
		電気空調設備工事 185万円
		給排水設備工事 270万円
		家具工事 135万円
		現状復帰工事 245万円
		その他雑費 30万円
現地管理運営費	1000万円	
機材レンタル代	400万円	
関係者旅費	300万円	
カタログ制作費	300万円	
広報費	300万円	
予備費	200万円	
合計	4000万円	

■■ 応募案作成協力者 ■■

- 設計協力 湊 健雄
- 画像協力 石田 建太郎
- 総合調整 浦野 むつみ

■■■ 作家略歴および参考図版 ■■■

西野 達

- 1960 名古屋市生まれ  
1984 武蔵野美術大学修了  
1997 ドイツ、ミュンスター美術アカデミー修了

■■主な個展

- 2015 「Solo Group Show-Taturo Atzu, Tatzu Nishi, Tazu Rous, Tatzu Oozu, Taturou Bashi, Tazro Niscino」 HAB Galerie、ナント、フランス  
「Sometimes Extraordinary, Sometimes Less Than Common」ブルターニュ公爵城、ナント、フランス  
「Taturo Atzu sculpture and drawing」ジュールヴェルヌ美術館、ナント、フランス  
「Taturo Atzu: The Garden Which is the Nearest to God」Oude Kerk、アムステルダム、オランダ
- 2014 「Hotel Manta of Helsinki」 Helsinki Art Museum、ヘルシンキ、フィンランド
- 2012 「TATZU NISHI Discovering Columbus」パブリックアートファンド、コロンバスサークル、ニューヨーク、USA
- 2011 「鉄道芸術祭vol.1 西野トラベラーズ・行き先はどこだ?」京阪電車なにわ橋駅アートエリアB1、中之島バンクセンター-A、Antenna Media、大阪
- 2009 「Lugares Comunes Project」ボゴタ、コロンビア  
「バレたらどうする」ARATANIURANO 東京  
「War and peace and in between」カルダーアートプロジェクト、アートギャラリーオブニューサウスウェールズ、シドニー、オーストラリア
- 2007 「Studio Exhibition」広島市現代美術館、広島  
「Tatzu Nishi」ブラム&ポー・ギャラリー、ロサンゼルス、USA  
「MAMプロジェクト」森美術館、東京
- 2006 「天上のシェリー」メゾンエルメス、東京
- 2005 「Café in the sky - Moon Rider」デン・ハーグ、オランダ  
「Cabinet 3」ゲント市立現代美術館、ゲント、ベルギー
- 2004 「Immer der Nase nach! 2004 Cologne」ケルン、ドイツ



- 「heute mir morgen dir 今日は俺、明日はお前」ルイス・カンパーニャ・ギャラリー  
ケルン、ドイツ
- 「Café in the sky - Moon Rider」ダブリン、アイルランド
- 2002 「Engel 天使」リットマン・カルチャープロジェクト、バーゼル、スイス
- 2001 「Der Neunsitzer 9人乗り」ユンゲ・クンスト、ヴォルフスブルク、ドイツ
- 「Interventionen 24 交渉24」シュプレングル・ミュージアム、ハノーファー、ドイツ
- 2000 アートテーク ケルン、ドイツ
- 1999 「Das habe ich gar zu gern 好きで好きでたまらない」  
ドルトムント・キュンストラーハウス、ドルトムント、ドイツ
- 1998 「Mir ist seltsam zumute 妙な気がする」プレーメン、ドイツ
- 1997 「obdach 宿あり」ケルン、ドイツ

#### ■■主なグループ展

- 2014 「Manifesta 10」エルミタージュ美術館、サンクトペテルブルク、ロシア
- 2013 「日産アートアワード2013」BankART Studio NYK、神奈川  
「BH·sia · C·mbio Cultural」ベロホリゾンテ、ブラジル  
「おおさかカンヴァス2013」大阪
- 2012 「開港都市にいがた 水と土の芸術祭2012」新潟  
「TRACK」アントワープ、ベルギー
- 2011 「第8回メルコスールビエンナーレ」ポルトアレグレ、ブラジル  
「第6回クリチバビエンナーレ」クリチバ、ブラジル  
「おおさかカンヴァス」大阪  
「シンガポールビエンナーレ 2011」シンガポール
- 2010 「あいちトリエンナーレ 2010」愛知  
「La Bienal de Arte Paiz - Heroe」グアテマラシティ、グアテマラ
- 2009 「Twist and Shout」バンコク芸術文化センター、バンコク、タイ  
「Harburger Berge」ハンブルグ、ドイツ  
「Estuaire 2009 - Villa Cheminée」ナント/セント-ナザレ、フランス
- 2008 「Scape2008クリストチャーチ ビエンナーレ オブ アート イン パブリックスペース」  
クリストチャーチ、ニュージーランド
- 2007 「Estuaire 2007」ナント/セント-ナザレ、フランス  
「Tatort 犯行現場」パダボーン、ドイツ  
「K·In Skulptur 4」ケルン彫刻庭園、ドイツ  
「MDE07」メデジン、コロンビア

- 2006 「7Treppen」 エリザベス・モンタグ財団、ヴッパータール、ドイツ  
「愉しき家」愛知県美術館、愛知  
「Okkupation 占領」ベルリン、ドイツ
- 2005 「Ecstasy エクスタシー」ロサンゼルス現代美術館、ロサンゼルス、USA  
「Projekt Migration 移住計画」ケルン美術協会ケルン、ドイツ  
「横浜トリエンナーレ2005」神奈川
- 2004 「第1回セビリヤ国際現代美術ビエンナーレ」セビリヤ、スペイン
- 2003 「At Least Begin to Make an End せめてそろそろ終わりにしよう」  
W139 アムステルダム、オランダ
- 2002 「Licht Routen 光の軌跡」リュウデンシャイト、ドイツ  
「リバプールビエンナーレ」リバプール、イギリス  
「Verzauberung durch Irritation 刺激の魔法」アーレン、ドイツ  
「日常茶飯美—Beautiful Life?」水戸美術館、茨城
- 2001 「Uni Kunst Tage 大学美術週間」ミュンスター、ドイツ  
「Po·ziezomer ポエツィーツォーメ ポエジーの夏」ワトー、ベルギー  
「direttissima ディレティシマ 一直線に」ミュンスター、ドイツ
- 2000 「Kunstbaden クンストバーデン（芸術浴）」ヴィースバーデン、ドイツ  
「Continental Shift 大陸移動」  
ルートヴィヒ・フォーラム、アーヘン、ドイツ
- 1999 「b-i-k-o-p-e-n-e-r 缶切り」  
ドルトレヒト市アートセンター、ドルトレヒト、オランダ
- 1998 「Hotel am Rhein」ケルン、ドイツ  
「Lieblingsort:K·In ケルンのお気に入りの場所」ケルン、ドイツ  
「East International イースト・インターナショナル」ノーウィッチ・ギャラリー、  
ノーウィッチ、イギリス

\* 展覧会の日本語タイトルは、参考表記としての仮題になります。

#### ■■受賞

- 2011 The Great indoors Award 2011 Relax&Consume部門大賞（Frame Magazine主催）
- 2013 日産アートアワード2013審査委員特別賞

#### ■■コレクション

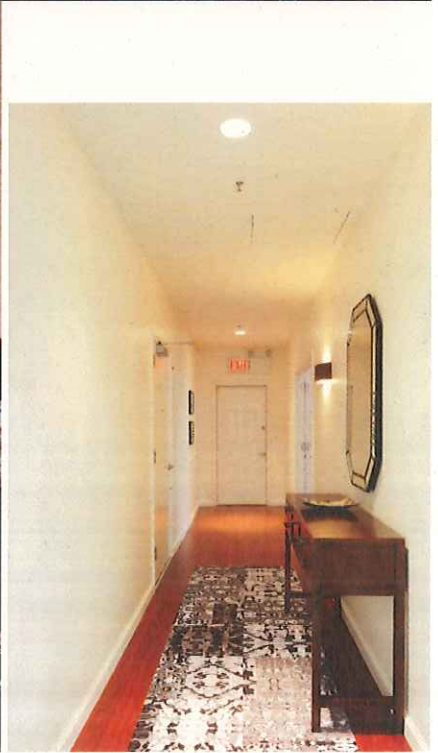
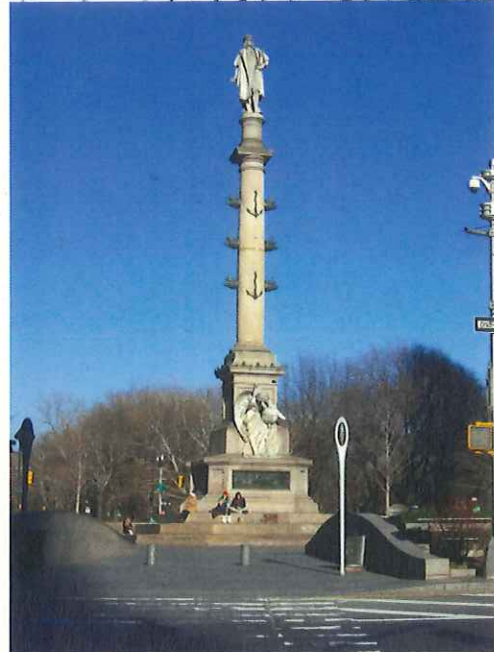
- 国立国際美術館、大阪  
高松市美術館、香川





2012年9月20日-11月18日  
Discovering Columbus

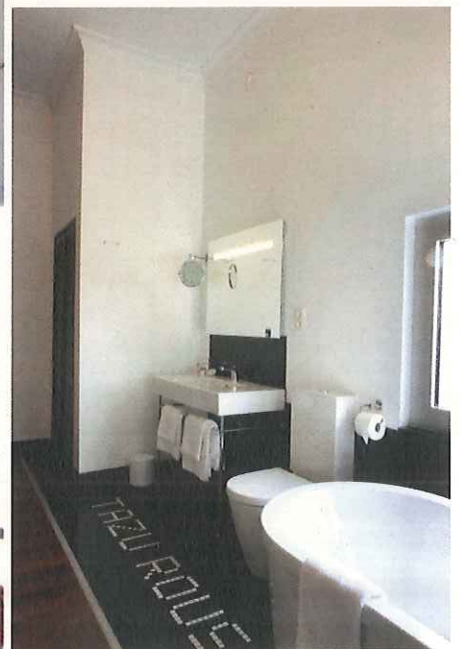
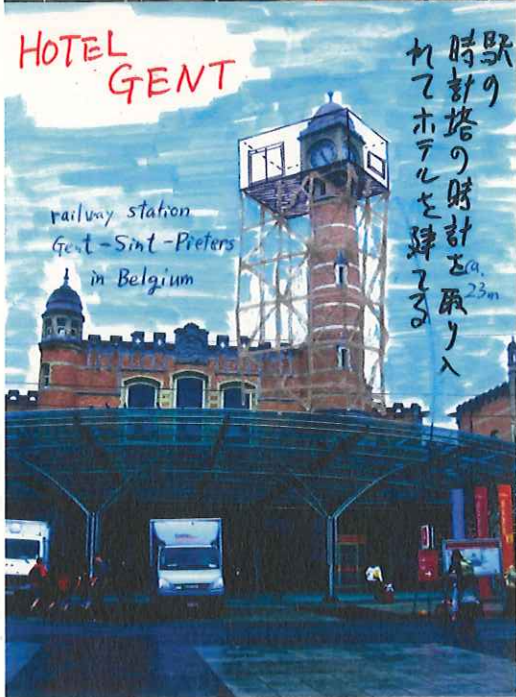
ニューヨークの円形交差点・コロンバスサークルの地上約20mにそびえ立つコロンブス像を囲んでリビングルームにするプロジェクト。  
普段意識して見たことがなかったコロンブス像を観客が文字通り「発見」することとなった。





2012年5月12日-9月16日  
Hotel Gent

ベルギー・ゲントのアートイベント「TRACK  
2012 GENT」出品作品。  
ゲントの歴史的建造物のひとつである  
駅舎の時計塔を囲ってホテルにしたプロ  
ジェクト。宿泊は事前予約制。バス、トイレ完備。







2011年3月13日-5月15日  
The Merlion Hotel

シンガポールビエンナーレ2011出品作品。  
シンガポールのシンボル、マーライオンを  
囲ってホテルにしたプロジェクト。  
10:00-19:00までビエンナーレ作品として一  
般公開され、20:30からホテルになった。  
宿泊は事前予約制。バス、トイレ完備。







2006年8月4日-10月1日  
Sometimes Extraordinary, Sometimes Less  
than Common

愛知県立美術館で開催されたグループ展  
「愉しき家」に出品。  
美術館に常設展示されているピカソ作品  
「青い肩掛けの女」(1902)を昭和の一般家  
庭の台所で囲った。





2012年10月13日-10月21日  
中之島ホテル

「おおさかカンヴァス」出品作。  
大阪・中之島公園のバラ園にある公衆トイレ  
を取り込んで実際に宿泊できるホテルの  
個室に変容させた。

